

オピニオン

日本の医療政策の背景にある「平等主義」と「自由主義」

中央区東支部 竹田文彦

本誌「オピニオン」欄に書かざるを得なくなり、改めて過去のご意見を読んでみた。

意見の内容は大旨、医師会の要求に対する政府、厚生省ならびに当局を後押しする日本マスコミとの間の連続した軋轢がそれらの本流を占めているようだ。

毎年と言っても良い程繰り返される要求闘争は、譬えは悪いが春闘に似ている。

十年余にわたる政府の失政による経済不況は、日本人の特質である勤勉精神をも減退させたり、終身雇用制度の崩壊傾向、企業生き残りを目的とした容赦ないリストラは失業者の増大と労働者の会社への帰属意識の希薄化をもたらし、又、行政においては厚生省エリートの収賄事件をはじめ、大蔵省、警察庁、農林水産省などほとんど全ての省庁にわたる官僚の腐敗が日常化し、家庭においては、父権の顕著な失墜によると考えられる家庭秩序の崩壊、教育現場においては、時代主義的視野狭窄と偏向精神から表出した教育能力欠如による学力低下と子供の人権反乱からみられる教育現場の崩壊、これらの現象を改めて斟酌しなくとも、起こるべくその背景に流れてきた「精神」の時代要求に対する崩壊を意味するのではないかと考える。

戦後、GHQにより強制されてきた精神的、組織的「不自由さ」は、五十年余もたてば日本人の精神構造はもとより、日本の社会構造の根幹にも大きな影響を及ぼすのは避けられないと考える。

この精神的「不自由」が日本人の国民性と相俟って戦後の日本人の精神構造を形づくったのではないかと想像する。去勢されたと言っても余りにも恐ろしい事だが、日本人のこの「従順さ」が結果的に歪な「卑屈さ」に変化し且つ、

「無責任」な体質になってきたのではないかと考える。

さらに元来日本人の精神構造に根付いた「平等主義」が今日の社会の至るところで不具合を起こしているのではないかと危惧する。

聖徳太子の『憲法』第一条、「和を以て尊しとなす」は、異論が出た場合、事を大きくせず、過不足なく皆が納得するところで手打ちをするという日本古来独特とも言える一つの問題解決法だが、一方、そのことにより責任を分散し、結果的に本来負うべき責任を追求しないという発想であるとも言える。

農耕民族である日本人は、村の共同体的社会で起こる摩擦は、村の指導者の指導性よりも利害の調整役としての役割に期待して解決してきた。

現代の日本人社会にもその行動様式は脈々と流れているように思える。

思想的な「平等主義」とは言えないが、日本の「平等主義」と言っても良いだろう。日本人は「平等」を信仰していると言っても良いくらいだ。

自分が成功しないのは、機会が平等でなかったと主張し、その見返りとして結果の平等を要求する有様だ。

日本人に根付いたこの「平等主義」信仰に拍車をかけたのが、いわゆる「戦後民主主義」ではなかったか。

我国の医療保険は、昭和2年から始まったが、多くの医師は自費診療が中心であり、戦後のインフレにより診療報酬の引き上げはあったが、そのことにより保険診療が普及し、保険診療を選択する医者も増加した。

又、当初は、診療報酬の支払い事務は医師会

がしており、その後、支払い基金が創設されて、医師会の主体性が奪われていく。すなわち、制限診療の始まりとなり、規制が強化されることになった。

「自由」診療が主だった医師の収入源が「制限」診療へと大きく変化して、結果的に官僚の政策次第で医師の生活が左右されることになった。

現在に至る、医師会と厚生省との対立は、すでに戦前から存在し、そして、戦後、GHQ指令で決定的関係を持つことになる。

GHQによる戦前の諸制度の否定は、医療分野にも例外なく影響し、戦後民主主義の根幹をなす「平等主義」がそれに拍車をかけた。

保険料や税金を納めない多くの国民が存在するにもかかわらず、国民皆保険の下、いつでも、どこでも、安価な医療費で高度医療サービスが受けられる「結果平等主義」が当然のことのようになってしまった。

税制の変革とともに今後の大きな争点になるものとする。

この「平等主義」の徹底した結果が、医療費の増大の大きな原因とも言える。当局の「医療費の適正化」という名の下、自らの行政の責任を我々医師の生活と引替に転嫁しようとしている。

すでに社会主義的統制経済は成立し得ないことが証明された今日、医療における、社会主義的平等主義が果たして今後も成立することが出

来るかどうか、甚だ疑問である。

官僚統制が日本の医療構造のすみずみまで浸み込んでしまっている現在、医療の世界にはすでに、「自由」は存在しないと書いても良いだろう。

厚生官僚統制下の医療行政には、ほとんど一方的な医療改革が叫ばれても、双方向的改革が尊重されてきたとは言い難い。

絶対主義的統制経済の崩壊が証明された今日、唯一、残存している統制医療が果たして今後も継続可能なのか。絶対的自由医療などとは言わないが、医療改革を求めるには「自由主義」という社会の基本原則を再確認することが改めて大事と考える。

前述したように、現代日本の精神的支柱の構造的崩壊が多くの現象として表出した。過度の「平等主義」を排し、「自由」な精神の下、「卑屈」な精神構造から脱却し、お互いに負担を担い、担った分報われる諸制度の再構築があらゆる面で必要ではないか。

今日の医療制度もかくあるべきと考え、医療にさらなる「自由」な精神を与え、且つ、社会保障を経費と考えずに、大きな投資活動として捉える発想の転換が求められている。

自らの政策責任の隠蔽を計り続ける当局のスケープゴートになってはならない。

今後共、医師会の毅然たる将来展望を内外に向け積極的に発信することは喫緊のことと考える。(リバーサイド内科循環器科クリニック)